

北タイ・カレン村落における村人の移動の変化とそれに伴う生業形態の変容

田崎 郁子 氏（京都大学大学院農学研究科修士課程修了）

タイでは1980年代以降、農山村部からバンコクを中心とした都市への人口移動が顕著に見られる。これに関しては、都市に移動する動機・移動した者のアイデンティティーに関する研究や、移動者と村に残った家族とのつながりを主張する研究などが行われてきた。しかしいずれも「移動者」に焦点を当てて移動の意味・その影響を考察しており、人口供給源である農山村において「在村者」—特に山地民と呼ばれる人々の視点からは考察がなされてこなかった。そこで本報告では、①村人の都市移動の増加に対して村ではどのように生業を対応させてきたのか、②これによる生業の変容を村人はどう捉えているか、という点から、村における移動の変化の意味を考察する。

調査村では現在未婚者の半数が都市へ移動しており、村での労働力低下をもたらしているが、それにもかかわらず、焼畑と水田での米生産維持が図られている。そこでまず、米生産維持を可能にしてきた諸要因—世帯員の移動パターンに合わせた除草剤・肥料の田畑への投入、若者から既婚女性へという除草作業の担い手の移行、それに伴う労働交換の変化と若者の役割の変化—や、都市移動経験者による換金作物栽培の活性化について検討する。また、村にいる既婚女性の「私は彼ら（都市への移動者）よりも草取りに長けている」という農作業における有能性を主張する言説や、移動経験を生かし村での新しい自給自足生活を目指す村人の試みを紹介する中で、在村者が移動による生業変容をどう捉えているのか、その一端を示す。以上より、村人の都市移動の増加によって村の生活がただ否応なく変えられていくのではなく、それに村人が巧みに対応していくことを指摘したい。